

用語解説

修道院: 戒律に従い、修道院長の統率のもとで日々を送る修道士、修道女に向けた僧院。

修道院長: 修道院によって選出ないしは任命された修道院の責任者。

大天使: 天上の階級で上位にある天使。

控壁: 壁を支えるために、壁から突き出すように設けられた柱。

修道院付属教会: 修道院付きの教会。

納骨堂: 墓地から取り出した人骨を集めた空間。
聖ベネディクトゥスの戒律: 6世紀にヌルシアのベネディクトゥスがモンテ・カッシーノ（イタリア）の修道院に向けて定めた戒律。修道院における祈り、労働、生活について規定したものだ。

トランセプト: 教会の身廊と内陣の間にあたる横断的空間。

インフォメーション

皆さまの意見をお聞かせください。
抽選で無料チケットを獲得できます。



Centre des monuments nationaux
Abbaye du Mont-Saint-Michel
50170 Le Mont-Saint-Michel
tél. **02 33 89 80 00**

www.abbaye-mont-saint-michel.fr
www.monuments-nationaux.fr

crédits photos © Christian Giudeman / Centre des monuments nationaux, réalisation graphique Marie-Hélène Forestier, traduction Tinduzco, imprimé en France, 2024.

聖ミカエル（フランス語でサン ミッシェル）

悪に立ち向かい、魂を計る大天使

天使の軍団を指揮する聖ミカエルは、中世期の宗教概念において非常に重要な位置を占めています。新約聖書では黙示録に大天使*が描かれ、ドラゴンに象徴される悪魔に挑み、征伐します。死後の世界への希望とおそれを抱く中世の人々にとって、聖ミカエルは最後の審判の日に死者を導き魂の重さを図る存在でした。

聖ミカエル崇拜

西洋における聖ミカエル崇拜は、5世紀末に初めて現れました。百年戦争の後、モンがイギリスに対して発揮した抵抗を受けて、フランスにおける聖ミカエル信仰に愛国精神が加わります。

聖人の図像



キリスト教の図像において、多くの場合に聖ミカエルは剣と天秤を手にした姿で描かれています。1897年より鐘楼の頂上にたたえられている彫像は、新しい尖塔の装飾に向けて建築家のヴィクトール・ブティグランの依頼を受けた彫刻家エマニュエル・フレミエの作品です。1987年に修復され、2016年に金めっきが再び施されています。

*裏面に解説あり

建築

岩山上で均衡を保った教会

モン サン ミッシェル修道院*は、ほかに例のない歴史的建造物です。モンのピラミッド形状を考慮した中世期の施工責任者によって、建物が岩山を取り囲むように構想されました。頂上に立てられた修道院付属教会*は、長さ80メートルの教会を支える地下礼拝堂の上に置かれています。

垂直構造の修道院

ラメルヴェイユは、13世紀当時の比類のない建築家技術が映し取られた建物です。北側の岩場の斜面において、3層構造の2つの建物が見事に実現されています。この建築には特殊な技術が要求されました。上昇するにつれてより軽くなるよう設計され、控壁*を用いて外側から建物が支えられています。

地形的制約と修道院としての制約

建物の設計にあたっては、地形的な制約に加えて、修道院生活の原則も考慮されなければなりません。モンの修道士は、一日を祈りと労働に捧げるものとする聖ベネディクト*の戒律を遵守していました。したがって建物は、祈りと労働という2つの活動、そして共同生活の場として構想されています。

*裏面に解説あり

モン サン ミッシェル修道院

モン サン ミッシェル

聖なる山としての起源



708年、アヴランシュ司教オベールによってモン・トンプに大天使を奉る聖堂が設けられました。モンは、またたく間に主要巡礼地となります。10世紀になると、ノルマンディー公がベネディクト会修道士を招き、モンの平地には村が発達します。14世紀に、この村は岩山のふもとにまで拡大されました。

さまざまな役割

百年戦争期にモン サン ミッシェルは不落の要塞となり、軍事建築の様相を呈していました。城壁、要塞構造によってイギリス軍のあらゆる攻撃に耐えたことから、モンは一国の象徴的な場所となりました。フランス革命時に修道士が追放されたことを受け、修道院*は 1863年に至るまで監獄となります。

普遍性をたたえた比類のない遺産

1874年、歴史的建造物に指定された修道院*は、大規模な改修工事を受けることとなります。以来、この工事は修道院*の全域において継続的に行われています。改装によって、中世期の人々が楽園をイメージし、地上の天なるエルサレムとして崇めていた修道院*の輝きが再現されました。1979年、モン サン ミッシェルはユネスコ世界遺産に登録されています。

*裏面に解説あり

1 衛兵の間

ここが要塞化された修道院*の入り口となっています。巡礼者はここで迎え入れられます。百年戦争期にはこの間に兵が配され、衛兵の間として使用されました。

2 大階段 - グラン・ドゥグレ

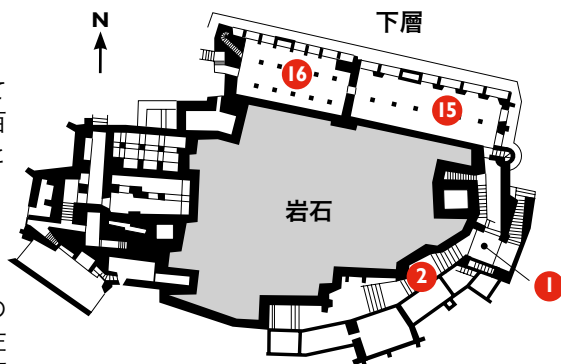
見学者は、大階段をたどってソーゴルティエのテラスに出ることができます。右側に教会、左側に修道院*の住居を眺めながら進みます。両者は吊り橋によって結ばれています。今日、14世紀から16世紀にかけて修道院長*の邸宅として実現された建物は、モニュメントの管理、ならびに修道院*共同体として利用されています。

3 西のテラス

西のテラスは、修道院付属教会*の旧広場、そして18世紀に火災で焼失した当初の身廊3区画分にあたります。1784年に、元来のファサードが再建されています。湾の景観が一望でき、西側にはカンカルの岩壁とブルターニュ、東側にはノルマンディーの岸壁が広がります。西側の内陸部にはモン・ドル、北側にはトンペレーヌの小島という花崗岩質の2山塊も見渡せます。沖合には、修道院*の建設に用いられた花崗岩の採掘地であるショゼー諸島がみられます。このテラスは、聖ミカエルの銅像を擁した1897年製のネオゴシック様式の鐘尖塔を眺める絶景ポイントになっています。

4 修道院 付属教会*

岩山の頂きに1023年より建設され始めた修道院付属教会*の一部は、斜面に建てられた4つの地下礼拝堂上に位置します。ロマネスク様式の身廊は、アーチ部、階廊、高窓という3段階の高さで構成されています。身廊は屋根組みを擁していました。1421年に崩壊したロマネスク様式の内陣は、百年戦争の後にフランボワイヤン様式で再建されています。

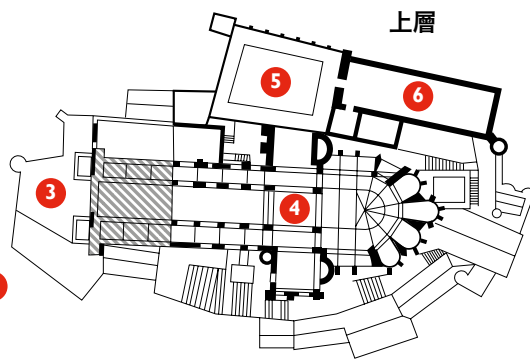


5 回廊

続いて、ゴシック様式の回廊を訪れます。この回廊をたどって建物間を移動することができます。同時に、祈祷や瞑想の場を提供していました。宗教行事の折には、この場所で礼拝行進が行われました。回廊は、13世紀の初頭に建てられたラメルヴェイユと呼ばれる建物の上層階に位置します。ここから、食堂や台所、教会、共同寝室、古文書の保管室、それぞれの階段に行き来することができました。西側の海につながった中央湾から教会参事会の間へのアクセスが構想されていたものの、参事会の建物は建設されずに終わりました。歩廊にかかる重量を軽減させるために、回廊には屋根が組まれていました。若干ずらして配置された2列の柱によって、常に変化を見せるパースペクティブが実現されています。

6 食堂

印象的な光に彩られたこの食堂で、修道士が食事を取っていました。一人の修道士が南壁に設けられた教壇から読唱を行うなか、沈黙の内に食事が進められました。屋根組みの重量を支える側壁には、入り口から目にするのできない細窓が配されています。



7 賓客の間

ここから階段をたどり、食堂の真下に位置する賓客の間を訪れます。ゴシック様式の華やかな間に王族や貴族が迎え入れられました。

8 大柱の地下礼拝堂

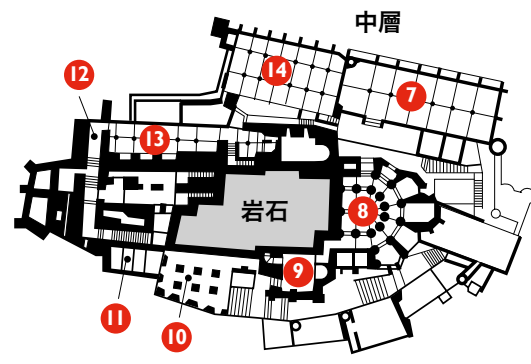
ゴシック様式の礼拝堂は、修道院付属教会*に迎え入れられた聖歌隊に向けて15世紀に設けられました。

9 サン マルタンの地下礼拝堂

ロマネスク様式の礼拝室は、西暦1000年を超えた頃に修道院付属教会*のトランセプト*南側の基礎として建てられました。全長9メートルにおよぶ印象的なヴォールトが配されています。

10 大車輪の間

サン マルタンの地下礼拝堂からの小通路をたどると、修道士の納骨堂*であった巨大な車輪の間に通じています。この車輪は、修道院*が監獄とされたことを受け、囚人の食事を運ぶために1818年に設置されました。中世期に建築現場で用いられていた車輪のレプリカが展示されています。



11 サンテ ティエヌ礼拝堂

サンテティエヌ礼拝堂は、19世紀初頭に崩壊した診療の間と修道士の納骨堂*の間に位置します。ここで、亡くなった修道士の埋葬に先がけて遺体を処理して装束を着せ、通夜が行われていました。

12 南北をつなぐ階段

南北をつなぐ階段をたどると、西のテラスの下方につながっています。この階段が、ロマネスク様式の修道院*内を行き来するための主軸として機能しています。

13 遊歩道

階段をたどっていくと、修道士の遊歩道に出ることができます。ロマネスク様式の修道院*に属していた二重身廊式の細長い空間は、リブヴォールト式の天井を擁します。この革新的な建築は、12世紀中期に誕生するゴシック様式を示唆しています。

14 写字の間

再びラメルヴェイユ内に設けられた間に戻ります。回廊を支えるために建てられたゴシック様式のこの大広間で、修道士が写本を行ったり、写本を研究したりしていました。今日、アヴランシュには200を数える中世期の修道院*の写本が保管されています。

15 施しの間

施しが行われていた間は、迎賓の間の階下にあたる一階に設けられています。この間で、修道士たちが貧民やあらゆる巡礼者を迎え入れていました。

16 貯蔵庫

最後の見学場所となる間は、かつて食料を保存する貯蔵庫として用いられ、今は姿を消した大車輪が配されていました。現在は、修道院*の書店・売店が配されています。

*裏面に解説あり